

29

『経穴示蒙』に見える書き入れについて

加畑 聡子^{1,2)}, 星野 卓之¹⁾, 小田口 浩¹⁾, 花輪 壽彦¹⁾¹⁾北里大学東洋医学総合研究所, ²⁾二松學舎大学

【はじめに】

西村公密(?-?, 字は玄周)撰『経穴示蒙』(文化8〔1811〕年刊)は『素問』『靈樞』を主として『甲乙経』等の古医書に依拠して考証された経穴書である。本文中及び欄上に散見する「營昇按」と記される書き入れは、丹波亀山藩医で江戸医学館の前身・躰寿館における百日教育時の経穴学講師を務めた小坂元祐(?-1815, 名は營昇, 号は牛淵)による自筆であると篠原孝市氏(臨床鍼灸古典全書13, オリエンツ出版社, 1990)が指摘しているものの、十分に論証されてこなかった。そこで本発表では、『経穴示蒙』に見られる書き入れを整理し、小坂元祐撰『経穴纂要』(文化7〔1810〕年序刊)と比較検討することで、江戸後期における経穴学派の態様について考察したい。

【書き入れの内容】

『経穴示蒙』の書き入れは65箇所見られ、「経穴纂要曰……」との記載が散見し、誤字・脱字はあるものの『経穴纂要』の内容とほぼ一致し、補足として加筆されていることがわかる。その例を挙げると、『経穴纂要』に従い『医学入門』『医学原始』に基づき足太陽膀胱経に眉冲穴を、『素問』骨空論に基づき任脈に断基穴を補入している。また、足太陰脾経の足部の流注について、『経穴示蒙』では公孫穴、太白穴の順とされているのに対し、それぞれに『経穴纂要』に記載される経穴位置を書き入れ、その逆順であることを指摘していることがわかる。このように、『経穴示蒙』に見える書き入れは、既に当時刊行されていた『経穴纂要』の記載と一致するものの、陽関穴の取穴「……陽陽泉上二寸」とするなど、『経穴纂要』には見られない誤字が散見することは、著者以外の第三者によって加筆された証左であろう。

【西村公密と小坂元祐】

西村公密の来歴については未詳だが、著書『春靄録』(文化2〔1805〕年序)があり、『経穴示蒙』書末の「谷王亭著書目録」には、刊行予定として『奇愈便蒙』『八十一難経講録』『褚氏遺書注』の書名が見えるが、管見の限り現存していない。『経穴示蒙』「凡例」に「一、称伝曰者、本邦古来諸名家之説、多所聞諸先師驪恕公者。」とあることから、考証学において先駆的業績を残した目黒道琢(1739-98, 名は尚忠, 字は恕公)の学統に連なることがわかる。また、小坂元祐も、『経穴纂要』丹波元簡序に「祖考玉池先生、受明堂之学於水藩良医、宮本春仙翁、而伝之于中島元春。元春、伝之于藤井貞三。貞三、伝之于良益。乃從春仙翁至元祐、凡為六伝矣。」とあり、目黒道琢の師であり、水戸藩医・宮本春仙を祖とする中島元春の経穴学派の流れを汲むことで知られている。従って、両者の考証学的手法を基盤とした経穴学は、宮本春仙に端を発する言ってよいだろう。また、『経穴示蒙』「凡例」には「……以て童蒙、経穴を学ぶの捷徑と為す。」、『経穴纂要』の手太陰肺経の流注図の冒頭に「初学ノタメニ仮名ニテ示スノミ」とあり、両者は古医書に依拠して考証した初学者向けの経穴教育書の制作を試みた点においても一致している。一方で、宮本春仙学派の特徴とも言える五里穴の手陽明大腸経から手太陰肺経への移入について、『経穴纂要』において「中島玄俊、以五里穴移入于手太陰肺経。然不可従。」と批判的態度が記されることは、両者の経穴学の相違を示す好例であろう。

【結語】

以上の『経穴示蒙』に見える書き入れは、江戸中後期に刊行された、初学者向けに配慮しつつも古医書に依拠して経穴を考証した『経穴纂要』及び『経穴示蒙』を比較対照したものであり、宮本春仙を祖とする経穴学派の展開を経時的に捉えるための好資料と言えよう。